

令和元年6月26日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03008

研究課題名(和文) 地域間交通・地域構造から見る東北古代史の再構築

研究課題名(英文) Recnstruction of the historical reserch of acient Tohoku area by the study of regional relationship

研究代表者

永田 英明(NAGATA, Hideaki)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：20292188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：古代東北地域における個々の地域間での人々の交通のあり方や、それを支える交通路そのもののあり方に着目して、古代東北における地域間関係の特色を明らかにした。具体的には、伊治城や雄勝城などの城柵、河川や駅路などの交通路を介した各地域間の交通・交流の実態を明らかにするとともに、それらによってまとめられた「奥羽」という地域の枠組が持つ政治的特色など論じ、これらをつづじて地域史の視点から東北古代史を捉え直すことを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代国家の支配領域の北進という観点から捉えられがちである古代東北地域・社会の構造を地域間地域間交通という観点から多角的に捉えるとともに、激しい歴史的变化をともなう東北古代史の展開を地域間交通のあり方という視点で捉え直し、残された文献史料の背後にある地域間関係のありかたを浮き彫りにした。広大な領域をもつ陸奥出羽両国の地域性に着目し、その相互関係を明らかにして、地域間を結ぶ「交通」への着目が東北古代史研究においても有効な視点であることを明示することができた。

研究成果の概要(英文)：I clarified the characteristics of the the inter-regional relationship, by focusing on the inter-regional traffic and traffic routes between each small area in ancient Tohoku area. In particular, I clarified actual situations of the inter-regional traffic or inter-regional exchange supported by the Josaku or traffic roads. Also, I considered about the meaning of these areas being integrated as the "Ohu" area. By these tasks, I tried to recapture the image of ancient history of Tohoku area from the viewpoint of regional history.

研究分野：日本古代史

キーワード：山道 海道 交流 駅路

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 東北古代史研究は、城柵官衙遺跡に対する考古学的研究と、これらを受けたかたちで文献史学の研究者を中心にすすめられた古代国家の辺境支配政策の研究によって水準が高められてきたが、それとともに重要なテーマとなりつつあるのが、東北における地域性の問題である。古代東北の地域性については、たとえば古墳文化や土器文化、城柵支配や郡制支配の展開などの問題が、いわゆるエミシ(蝦夷)論との関わりを持ちつつ、南部と北部の関係として論じられ、やはり大きな成果をあげている。しかし近年ではさらに陸奥と出羽における辺境支配のあり方に質的な相違があること、それが在地社会のあり方を反映していることも注目され、さらには大崎・牡鹿地方、北上川中流域、三陸沿岸地域など、基礎的な単位となる個々の地域ごとの政治支配や在地社会のあり方の相違にも関心が集まりつつある。こうした東北内部の地域的多様性への注目は、辺境支配の展開、およびエミシ社会の対応、両者の相互関係という視点を軸に進められてきた東北古代史の展開や東北の古代社会に対する理解を深めていく上できわめて重要な視点と考える。

(2) 地域性の問題を考える上では、文献史料や考古学資料を通じた地域ごとの特性を把握すると共に、諸地域の間におけるネットワークとその基盤、すなわち交通の問題が重要になると考える。古代東北における地域間の交流・交通の問題はすでに従来から注目され、すでにそうした視点を取り入れた研究成果が出されてはいるが、まだ十分に展開されているとまでは言えない。古代交通史の研究は1980年代以降、古代道路に関する歴史地理学・考古学的調査の進展に牽引される形で、駅家遺跡や駅路などの官道研究に大きな成果をあげてきた。しかし地域史という視点に立つときには、こうした「官道」の外に広がる、水・陸を問わない様々な交通路やネットワークにも視点を向けざるを得ない。多種多様な地域間交通の存在をふまえた形でその再構築を図る必要がある。同時にそれは、地域史の視点から東北古代史像を再構築していく上できわめて重要な要素になるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究はこうした視点を重視し、古代東北における地域関係の実態的解明と、陸奥・出羽関係の検討を通じた古代東北の一体性と多様性の解明、という二点を課題として研究を行うこととした。これらにより、(1)古代国家の支配領域の北進、という観点からとらえられがちな古代東北地域・社会の構造を地域間交通という視点から捉えより多角的な東北史のとらえ方を可能にするとともに、(2)激しい歴史的变化を伴う東北古代史の展開を、地域間交通のあり方の展開と変質という視点で捉え直すことができるのではないかと、(3)それは陸奥出羽という資料的にも比較的恵まれた地域を素材にした、古代地方社会の地域間交通を考えるためのケース・スタディとすることができるのではないかと、(4)それらをもとに陸奥・出羽という枠組を地域関係という視点から捉え直すことで、現代につながる「東北」という地域的枠組の意味を歴史的に考える素材を提供することができるのではないかと、以上の諸点で成果が期待できるのではないかと考え、本研究を企画した次第である。

3. 研究の方法

本研究では、城柵遺跡など東北各地の拠点遺跡で蓄積されている考古学的成果及び木簡・漆紙文書などの出土資料と、正史や法制史料を中心とする文献史料の双方について、辺境支配と地域間交通との関わりという視点を意識して分析を加えた。とりわけ留意したのは、(1)奥羽の駅路その他の交通路の復原にかかる史料の収集と分析、(2)蝦夷の朝貢や征夷軍の行路等、実際の人間の地域間の往来にかかる史料の収集と分析、(3)奥羽両国内部の小地域単位での豪族の動向、他地域との政治的・文化的関係にかかる史料の収集と分析、といった点である。

出土資料の調査については、本研究による調査に比べ、自治体史の編纂事業などにかかる調査でも調査をおこなう機会に恵まれ、岩手県北上市、花巻市や、秋田県内の大仙市・秋田市などで出土した資料を調査することができた。また現地踏査についても同じく岩手県北上市、花巻市や三陸沿岸域(岩手県陸前高田市、山田町、宮古市)、秋田県内の横手市、大仙市・秋田市、青森県八戸市等で現地踏査を実施した。

その成果を踏まえたうえで、こうした諸地域と交通路によって構成された古代における「奥羽」という行政的枠組の意味や内容を、文献史料を中心に検討することとした。これらの作業を通じて、古代東北地域の地域としての性格について、多様性と一体性という二つの視点から把握することを試みようとした。

4. 研究成果

三年間にわたる研究の成果として、以下のような知見や成果を獲得した。その一部は論文や学会発表の形で公表し、未発表の知見についても今後公表を進めていく。

(1) 陸奥国における南北の地域間交通、とりわけ、「山道」と呼ばれた岩手県内陸部の北上川中流域と仙台・大崎平野の間における地域間交通を支える栗原地方の位置づけについて、伊治城の政治的役割という問題と絡めつつ関係資料の総合的な検討をおこない、一定の見通しを得ることが出来た。いわゆる「三十八年戦争」下における伊治城の関係資料には宝亀十一年(780年)から延暦十五年(796)までの空白期間があり、伊治城の復興は延暦十三年(784)の征夷以後にまで遅れること、この間に行われた延暦八年(789)征夷において伊治城ではなくその南方の玉造塞が拠点とされていること、延暦十一年(782)の山道蝦夷胆沢公阿奴志己の言上に見られる「伊治村俘」の動向から当時栗原地方の南北交通を制する役割を伊治城が果たし得ていなかったことなどから明らかにし、このことから、古代国家が伊治城の復興という課題を後回し

にしながら北上川中流域に派兵し続けていたことが浮き彫りになった。河川の水系ではむしろ「海道」地域の南端である登米地方などとのつながりが強かったと見られる栗原地域が、古代国家にとっては「山道」地方とを中継する玄関口として重視されていくという伊治村＝栗原郡の地政学的な位置づけを明らかにすることが出来た。その成果は2016年度に東北学院大学主催のシンポジウムで報告し、またその後熊谷公男編『古代東北の地域像と城柵』に「三十八年戦争と伊治城」と題して収録することができた。

(2) 北上川中流域の「山道」地域そのものについては、終末期古墳や集落遺跡に関する考古学的研究をもふまえながら文献上に見られる「村」の関係、山道地方の蝦夷集団の構造や彼らと仙台・大崎平野の城柵の関係について検討をおこない、とりわけ『続日本紀』にみえる和君計安曇のような城柵と「山道」を往復する人々の動向について再評価をおこなって、(1)の成果と併せて八世紀における陸奥国の南北地域間交通の実態を浮き彫りにすることが出来た。その成果の一部は、2017年に盛岡市で開催された蝦夷研究会20周年記念シンポジウムでの報告「文献史料から読み解く蝦夷」において報告することができた。

(3) 「海道」と呼ばれる三陸沿岸地域に関しては、気仙郡の成立とその特色を近隣地域との関係に注目して検討した。現地踏査と関連文献史料の検討をふまえ、古代においては郡制が施行されなかった閉伊地方との比較、あるいは同じ郡制施行地域でありながら城柵が設置された桃生・登米地方や内陸部との対比という観点で、沿岸地域における郡制施行の最北端となった気仙郡を拠点に展開された南北・東西の地域間交通の実態を浮き彫りにすることができた。知見の一部は2017年度に大船渡市で開催された市民向け講演会「気仙地域の魅力を語る」における講演「古代蝦夷と「海の道」」において報告を行った。

(4) 陸奥国大崎平野における地域関係については、在地豪族の動向を小地域単位で整理し、国衙機構との関わりにも留意しながら分布のあり方という視点から検討をおこなった。

陸奥国の大崎平野については、関東地方を中心とした他地域からの移民を基盤として設立された2～3郷程度の小規模郡が密集した「黒川以北十郡」として把握され、蝦夷の地に隣接した「辺郡」としての特色が指摘・注目されている。本研究ではやや視点を変えて、これに、「田夷」を主体として設立された遠田郡を加えたかたちで、地域全体としての豪族層の動向を検討したが、その結果として、牡鹿郡・遠田郡など、「海道」に比較的近接した東半部の豪族たちが八世紀初頭という比較的早い時期から陸奥国内での政治的地位を上昇させてくるのに対し、「山道蝦夷」に近接した黒川、賀美、玉造など西半部の諸郡では有力豪族の成長が比較的遅いなど、地方豪族のあり方に地域的な偏差がうかがえることに注目し、その成果は、2019年2月の古代城柵官衙遺跡検討会に於ける特集報告「陸奥における城柵造営と在地氏族」の一部として報告した。

(5) 出羽国の地域間関係については、まず天平九年および天平宝字年間における第一次雄勝城造営計画について、多賀城・秋田出羽柵の連絡のみならず胆沢地方との交通関係にも着目すべきことを諸資料の分析からその特質を指摘した。雄勝城に関する成果の一部は、横手市沼柵公開講座「古代横手盆地をめぐる交通路と政治・社会」(平成28年8月7日 秋田県横手市雄物川コミュニティセンター)において報告を行った。その後秋田城についても、出土文字史料などを手掛かりにした交通路の問題について検討を進めたが、その成果を研究期間内に公表するには至らなかった。これについては今後成果をまとめ公表していく予定である。

(6) 今回の研究は東北北部を主な対象とするが、同時に仙台平野と陸奥南部との地域関係を考える手掛かりとして、仙台平野の南端に位置する玉前駅家や多賀城跡出土木簡にみえる玉前割周辺の交通路と地域支配の関係についても、阿武隈川水運とのかかわりを意識して検討を進めた。その成果は『岩沼市史』通史編に掲載された論考の中において活用した。さらに関連して、古代の関(割)の通行証とされるいわゆる過所木簡に関する問題について資料的な検討をおこない、その成果を2018年6月の木簡学会浜松特別研究集会で報告すると共に『木簡研究』四十号誌上にて公表した。

(7) 以上のような個別地域を取りあげた研究と共に、陸奥出羽という地域的枠組みを地域間の相互の関係として捉えなおす試みとして、かつて発表した陸奥出羽両国を統括する按察使制度の成立に関する問題を展開させる形で研究をおこなった。天平九年の多賀城・秋田を結ぶ奥羽連絡路開通計画が当時の陸奥出羽を含む広域的な地域政策と密接に連動していること、そうした広域的な政策は天平期後半に按察使任命が中断するとともにみられなくなること、従来藤原仲麻呂政権による左遷人事とみられがちであった天平宝字元年の相伴古麻呂の陸奥按察使就任も東北政策という視点から見ればそのような奥羽を統括する広域的な政策の復活に対応するものであり、雄勝城の造営や秋田城の改修、それらを連結する駅路の開通といった政策に連動しているものであること、宝亀年間の相伴駿河麻呂の按察使就任もまた同様の視点から捉えることができることなどを指摘した。その成果は2017年に開催した東北学院大学東北文化研究所の研究例会で報告し、今後論文等の形で公表をしてく予定である。

(8) 三年間に取り組んできた課題の中には、まだ十分な解決に至っていない問題もあるが、東北古代史の構造と展開を、交通の問題を中心とした地域間関係という視点から捉え直すという試みは一定程度達成できたのではないかと考える。同時に陸奥・出羽という枠組を地域関係という視点から捉え直すことで、現代につながる「東北」という地域的枠組の意味を歴史的に考える素材を提供することについても、未だ課題が残されているが、一定の見通しを獲得することはできたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

永田英明, 「交通史からみる伊場遺跡群出土文字資料」, 『木簡研究』40, 査読無, 2018年, 178-190 ページ

〔学会発表〕(計8件)

永田英明, 「陸奥における城柵造営と在地氏族」, 第45回古代城柵官衙遺跡検討会, 2019年

永田英明, 「交通史から見た伊場遺跡出土文字資料」, 木簡学会静岡特別研究集会「東海の地方官衙と木簡」, 2018年

永田英明, 「古代奥羽の交通と駒籠楯跡」, 山形県大石田町駒籠楯跡発掘調査報告会, 2018年

永田英明, 「古代蝦夷と「海の道」」, 市民向け講演会「歴史・考古学から気仙地域の魅力を語る」IV, 2018年

永田英明, 「古代国家の東北政策と地域間交通 「陸奥出羽」の枠組みをめぐる」, 東北学院大学東北文化研究室例会, 2017年

永田英明, 「文献から読み解く古代蝦夷」, 蝦夷研究会20周年記念シンポジウム, 2017年

永田英明, 「古代横手盆地をめぐる交通路と政治・社会」, 横手市沼柵公開講座「雄勝城と沼柵」, 2017年

永田英明, 「三十八年戦争と伊治城」, 東北学院大学アジア流域文化研究所シンポジウム「栗原市伊治城跡から読み解く東北古代史」, 2016年

〔図書〕(計3件)

永田英明, 佐藤信ほか15名(共著), 筑摩書房刊, 『古代史講義(戦乱編)』(ちくま新書), 筑摩書房, 2019年, 180-186 ページ

永田英明, 熊谷公男ほか12名(共著), 高志書院刊, 『古代東北の地域像と城柵』2019年 283-302 ページ

永田英明, 徳竹亜紀子ほか10名(共著), 岩沼市刊, 『岩沼市史』通史編1(古代・中世), 475 ページ

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕(計3件)

永田英明, 「書評と紹介 『青森県史 通史編 原始・古代・中世』(第三章～第六章)」, 『弘前大学國史研究』146号, 2019年

永田英明, 「書評 市大樹著『日本古代都鄙間交通の研究』」, 『史学雑誌』127-10, 2018年

永田英明, 「書評と紹介 武田佐知子著『古代日本の衣服と交通』」, 『日本歴史』827, 日本歴史学会, 2017年4月

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。